



随筆集「焰ほのに手をかざして」

「岩科村峯にて、佐藤津右衛門より。贈、石垣りん君へ。ひらいた扉いっばいに筆が走っていた。」

「なあ、りんやイ。お前が物を書くのはいい。しかしわれこそは、なんて考えるでないぞ。大ぜいの人のした仕事のはしに、私も一筆書き添えさせていただきます。そういう気持でやるのだ。」

日露戦争で負傷した…という老人は、うちわを片手に、私の受け答えに貸す耳なく、一方的な話をした。あのじいさま。私に言葉の形見を残した。」



谷川俊太郎も言う。『茨木のり子さんと二人で過度の謙遜や遠慮はときに傲慢に通ずると苦情を言った、と』

伊豆へ来られる時でも、出版、テレビ出演でも、事前にほとんど連絡はなかった。謙虚、非常な恥ずかしがり屋だったので。役場の方からわかったりして、親類へ教えたりもしました。



石垣りん



昭和39年当時の石垣りんさん

随筆集「夜の太鼓」

「去年の夏は岩地と、その周辺で三日間テレビ会社の仕事をした…帰りがけに天神原へ足を延ばし、天神様にお参りすることもできた。…秋には仁科を訪ね、海辺の民宿に一泊。…急いで窓を開けると、小高い山影を背景にして、右手から灯をともした漁船が一艘近付いてくる。時計を見ると二時四十五分。」

蒲団に戻ったら、ものの十五分もたためまに、またポンポンと私を軽く起こす音。それから十分に一艘、五分で次の船、と実に敵かな出漁の儀式が続いた。日毎そのようにして繰り返される深夜の観艦式は、権力を誇示することもなく、暮らしの防衛を果たすのだろう。星や月を勲章にして。」

この民衆を大事にする思想には、強く心打たれるのです。